



青少年赤十字 モデル校報告書集 (平成23年度版)



青少年赤十字の目的は、

児童・生徒が赤十字の精神に基づき、世界の平和と人類の福祉に貢献できるよう、日常生活の中での実践活動を通じて、いのちと健康を大切にし、地域社会、世界のために奉仕し、世界の人々との友好親善の精神を育成することです。

このため、3つの実践目標を提示しています。

1. 健康・安全—— 生命と健康を大切にする。
2. 奉仕—— 人間として社会のため、
人のために尽くす責任を自覚し、
実行する。
3. 国際理解・親善— 広く世界の青少年を知り、
仲良く助け合う精神を養う。

青少年赤十字では、児童・生徒が自主的で、
自律した生活態度を養うために、

「 気づき 」

「 考え 」

「 実行する 」

という態度目標を掲げています。

はじめに

青少年赤十字モデル校の制度は、全国の青少年赤十字加盟校の中から、先進的または参考となる青少年赤十字活動を実施する学校を選考し、2年間モデル校として指定し、同校の更なる活動の活性化や地域への活動の理解促進を図るなど、青少年赤十字活動の振興を図る目的で平成17年度から始められました。

青少年赤十字は、命の大切さを理解し人間の尊厳を守る心、すなわち人の痛みが分かり、人を思いやることのできる心をもった青少年の育成を目的としています。そのために「健康・安全」、「奉仕」、「国際理解・親善」という実践目標を持ち、活動に当たって「気づき、考え、実行する」という態度目標を掲げています。

これは命の教育、心の教育、生きる力の育成という点で学校教育が目指していることと共通しています。

青少年赤十字は、この教育目標を実現するため、そのよりどころとなる価値（赤十字の理念）やそれに付随するさまざまな教育的手法、研修や教育資材、人的な支援などまとまった体系を提供しています。これらは青少年赤十字に加盟するメリットとなるものですが、特にこれから青少年赤十字活動を導入しようと考えている学校や、加盟しているけれどもなかなか活動の一步が始められないという学校、また今後新たな活動を模索されている学校にとって、そのメリットが具体的にどう生かされているか、教科や学校・学級運営にどのように活用されているかを知る材料として、このモデル校報告書集を作成いたしました。

これらモデル校は、全国から毎年10校を指定しています。この報告書集に掲載されているモデル校は、平成21年度・22年度に指定されたもので、その活動の概要が紹介されています。

青少年赤十字を第一線で指導される先生方、さらにまた青少年赤十字活動を支援してくださっている教育機関の先生方をはじめ関係者の皆様にとって、本報告書集が青少年赤十字活動の理解と活動の充実に向けての一助となれば幸いです。

最後に、本書の編集にご尽力いただきましたモデル校選考会の先生方、活動事例のご報告をいただいた先生方に深く感謝申し上げます。

平成23年10月

日本赤十字社

Contents 目次

- 1 はじめに
- 3 「青少年赤十字モデル校報告書集（平成 23 年度版）」の使い方

幼稚園の部

- 6 熊本県 清水学園城北幼稚園^{じょうほく}

小学校の部

- 10 岩手県 盛岡市大慈寺小学校^{だいじじ}
- 12 東京都 杉並区立和田小学校^{わだ}
- 14 徳島県 徳島市立千松小学校^{せんしょう}
- 17 愛媛県 今治市立日高小学校^{いまばり ひだか}
- 20 兵庫県 西脇市立西脇小学校^{にしわき}

中学校の部

- 24 埼玉県 さいたま市立大宮南中学校^{おおみやみなみ}
- 26 石川県 金沢市立城南中学校^{じょうなん}

高等学校の部

- 30 茨城県 県立日立第一高等学校^{ひたちだいいち}
- 32 群馬県 県立富岡東高等学校^{とみおかひがし}

- 35 日本赤十字社本社・各都道府県支部所在地一覧
- 36 青少年赤十字モデル校選考会選考員
（平成 17 年度～平成 23 年度）

「青少年赤十字モデル校報告書集（平成 23 年度版）」の使い方

報告書集に何を期待するのか

この報告集に取り上げられた活動からは、青少年赤十字のメンバーである児童・生徒たちをはじめ、指導者の先生方、さらには活動を支援くださる地域の方々の考えと行動の息づかいが伝わってきます。これらの活動にヒントを得て、さらなる活動への意欲がかきたてられ、青少年赤十字の活動や活動の場が無限に広がっていることを感じていただくことができれば幸いです。

赤十字の世界では、「人道の四つの敵」として、「利己心」「無関心」「認識不足」「想像力の欠如」を挙げています。私たちの活動実践が、それらにどのように取り組み、そしてメンバーである児童・生徒たちの成長に有効なものとなるかを本書を通して学んでいただきたいと思います。課題解決のヒントを発見したり、新たな発想による活動を創造する一助にさせていただきたいと願っています。

■ 報告書集の構成

- ・活動の単位、期間、教育過程上の主な位置づけを表題の後に統一して表示しました。通年の活動か一回の活動かなどが一目でわかります。
- ・「ねらい」や「ポイント」の欄を設置することで、何をねらいどのように活動を組み立てるのかを読み取ることができます。
- ・短い一言アドバイスとして、選考員のコメントを掲載しました。
- ・報告書中では青少年赤十字を「JRC(Junior Red Cross)」と表現している箇所があります。

■ 研究や情報交換の出発点として

- ・本報告書集は読み易さを配慮したため、紙面の都合でモデル校の意を十分尽くせないものが多いかもしれません。日本赤十字社を通じて、是非学校同士でも情報交換を行ってください。
- ・研究発表会やモデル校視察など相互訪問の資料に活用し、互いの情報交換とするのもマンネリ対策として有効です。

■ お待ちしています

- ・青少年赤十字モデル校に関するご意見、提案など何でも結構ですので、日本赤十字社の青少年・ボランティア課にお寄せください。

日本赤十字社 総務局 組織推進部 青少年・ボランティア課
住所 〒105-8521 東京都港区芝大門 1-1-3
電話 03-3438-1311(代表)、03-3437-7082(ダイヤルイン)
HP <http://www.jrc.or.jp>

著 名 人 の 言 葉

Phrases on the Red Cross Movement by the World celebrities

赤十字は信念と行動の合体である。そこに青少年が加わるとき、青少年独特の誠実、純真、率直を持ち込むことになる。この特質は機を得て偉大なる力を発揮するものであるが、青少年赤十字こそは、この機会を青少年に与えるものである。

レネー・サンド

(元赤十字社連盟技術顧問)

幼稚園の部

Kindergarten



わくわく・どきどき・ときめき大作戦！

小さな、たくさんの気づきから、考え、行動する子どもをめざして

熊本市 清水学園城北幼稚園 じょうほく

活動の種類

健康・安全、奉仕、
赤十字理念の学習

活動の単位

全園の取り組み

活動期間

通 年

活動のねらい

幼稚園の日常の生活で出会う人とかかわり合いの中で、思いやりのある気持ちを持ち、主体的に奉仕活動に取り組もうとする子どもの基礎を育成する。

具体的な活動内容

1. こども赤十字加盟登録式（年長組）

青少年赤十字の加盟登録式等で、日本赤十字社の職員や子どもたちは青少年赤十字賛助奉仕団からわかりやすく話をしてもらい、気づき、考えて、何をするか、徐々に奉仕活動への理解を深めていった。また、登録式でもらう青少年赤十字ワッペンを子どもたちは、活動の意欲をかきたてるシンボリックなものとして喜んで着用しており、進んで「よいこと」を行おうという意欲が伸びている。

2. 困った探し・よかった探しの話し合い （小さな気づきから行動へ）

日常生活の中で「困ったこと」「気づいたこと」をクラスで話し合い、困ったり、気づいたことがなかった子どもたちとも、意見を共有することで、クラス全体が、気づき行動できるようになることをねらいとしている。

また、「困ったこと」に気がついて行動している友だちを見かけたら紹介する（よかった探し）の取り組みも同時に発表する機会を設け、子どもたちは気がついたら意欲的に行動できるようになった。一例として、トイレのスリッパ並べ、図書室の本やイスの片付け、花の水やり、小さい子のお世話、砂場のおもちゃの片付け、お客さんにあいさつをしてスリッパを出すなどの活動が挙げられる。

3. 赤十字の理解と赤十字活動への協力・奉仕

○救急法普及月間イベント

「ワールド・ファースト・エイド・デー」への参加協力



救急法普及イベントのひとコマ

日赤熊本県支部の救急法イベントに参加し、ステージ上でハンカチを使用した包帯のしかたを披露した。小さな自分たちでも人助けができるという誇らしさも感じられ、「人の役に立つ」ことを考えるよい刺激となり、色々な活動に対するやる気にもつながった。

○「海外たすけあい」街頭募金への参加

あらかじめ、地図や地球儀、新聞記事、赤十字の「海外たすけあい」パンフレット等を使って、集めたお金がどんなことに役に立つのかを調べて子どもなりに話し合い、平成22年度は街頭募金に20人の園児が参加した。奉仕団や小中高の青少年赤十字メンバーと協力して元気な声で呼び掛け、「人の役に立ちたい」という意欲が高まった。



海外たすけあい街頭募金活動

○「ハイチ地震」被災者支援（救援金協力）

地球儀や新聞の切り抜きを使って、地震が起こった場所やその国の人々の暮らしを知り、被災した人たちが困っていることは何かを各家庭で話し合った。

結果的に救援金を送ることになったが、世界の状況を知ること、その年代なりに自分たちのいる恵まれた環境を理解したり、家族とコミュニケーションをもつ過程も大事と考える。

4. うれしいあいさつ（早い勝ち!）

「おはようございます」や「こんにちは」など、「声を掛けられるとうれしい」とその場で伝えることからスタートして、どんなあいさつが気持ちがよいか、どのくらいの声がいいのかを話し合った。

「うれしかったこと」として「うれしいあいさつ」が子どもたちの中に蓄積され、小さかった声も自信とともに大きくなってきた。また、保護者や来園者、近所の方々からも、子どもたちに対して協力的に声を掛けていただいており、徐々にあいさつを使い分けて行うことができるようになり、広がりが出てきた。

5. 花いっぱい活動（うれしい思い）

花が咲いた喜びを花を育てるきっかけとし、前の年に採集した種、子どもたち自身が持ってきた種、子どもたちの希望で購入した種を、クラスごとに、園庭やプランター、幼稚園周辺の近所の方の散歩道にまき育てた。

水をやり過ぎたり、梅雨の時期に根腐れをおこしたり、せっかく大きくなった芽を小さい学年の子どもたちが抜いてしまったり、大きくなったのに水やりが不足して枯れそうになったりしたが、その時々で皆で考え、花の水やり時間等を工夫した。きれいに咲いた花々は、地域の方々から大変喜ばれている。

6. みんなの畑・おいしい野菜（感謝を伝え合う）

幼稚園の「どんどこ畑」やプランター、肥料袋を使って、夏にはトマト、さつま芋、きゅうり、ジャガ芋、ニンジン、冬に向かってカブやブロッコリー、ほうれん草、春菊、小松菜、チンゲン菜、春に向かって、ニラ、いんげん豆、玉ねぎの種をまき、苗を植え付けた。収穫までは、水をやり草や虫を取ったりなどして、皆で苦労して育てた。

収穫した野菜は、クラスでクッキングをしたり、近所のお年寄り世帯にプレゼントしたり、持ち帰って家族と食べたりして楽しんだほか、日ごろお世話になっている近所のお年寄りと一緒に、具だくさんの「だご汁会」を行った。

会食で交流する中、おじいさんやおばあさんから「おいしかったよ。じょうずだね」と声を掛けられ、「ありがとう。またおいしいお野菜育てるよ。また来てね」と喜んで答えたり、保護者からは、「嫌いだと思っていた野菜を、『自分たちが育てて収穫して持ち帰った』と話し、家族が『おいしい』と言って食べると子どもも『おいしい』と言って食べた」という話も聞かれた。

「いのち」を食べることへの感謝、「いのち」を育てることの難しさ、収穫の喜び、自分たちの野菜を喜んでくれる人がいることが、子どもたちのさらなる意欲につながっていることがうかがえる。



クラスでクッキング

7. 特別養護老人ホーム「あいこう」の訪問

今、おじいさん・おばあさんと一緒に暮らしている園児は少ない。幼稚園の近くにある高齢者福祉施設を訪ね季節に応じて一緒に七夕飾りを作ったり、歌を歌ったり、手遊びをするなどして交流しており、施設でも大変喜ばれている。

8. 中学校の活動への協力（エコキャップ）

地区の中学校の生徒会が、ペットボトルのキャップを集めてポリオワクチンを送る活動（エコキャップ）をしていると聞

き、幼稚園でもキャップを集めることになった。

日ごろから散歩コースでもある中学校に持参して、中学校の先生や生徒たちから「ありがとう」と言葉を掛けてもらうことで、引き続き集め、協力しようとする気持ちがわいてきている。

9. 保護者対象「災害対応研修」

保護者を対象に、ハイゼックス包装食の炊飯体験と幼児安全法講習を組み合わせた「災害対応一日研修会」を実施し、赤十字職員と青少年赤十字賛助奉仕団から指導を受けた。

当日は、保護者会主体で運営され、特に幼児安全法の講習では我が子の命や事故防止に直結するだけに、皆が交替で実技に取り組み、熱心な質問も出ていた。

講習は、実際に役立つ手技・知識であり、親子の触れ合いやきずなを図る効果も期待できる。実践報告会では、「親子で手当て」と題して親子が楽しく一緒に学ぶ幼児安全法の公開保育も行った。

10. 青少年赤十字モデル校実践報告会・公開保育（平成 23 年 2 月 23 日）

青少年赤十字モデル校として指定を受けた 2 カ年間の実践活動を発表した。

年少から年長までの 9 クラスの公開保育、日赤熊本県支部による基調講話を行い、幼児期から育むボランティアの心、幼稚園・保育園の赤十字活動の事例や情報を発信する好機となった。

開催にあたっては、他園はもとより、保護者、自治会など地域の方々にも広く参加を呼び掛け、赤十字の災害支援活動として「非常食炊き出し（ハイゼックス包装食）」の体験・試食も併せて行った。

活動のポイント

○掲示板の活用

「掲示板」を利用して、子どもたちの日ごろの活動を積極的に紹介（フォトニュースレター）した。併せて、世界の子どもの様子や実情もわかりやすく伝え、自分たちとは異なる環境におかれた海外の子どもたちに気づき、思いを至らせるなどの工夫に努めた。

○地球儀や世界地図等の活用

世界のニュースについて、地球儀や世界地図、その国の情報が記載された国旗の絵カード、また世界の国々のことが書かれている絵本等を用いることで、子どもたちの世界観を広げ、「世界のひとと仲良くしたい、一緒に遊びたい、役に立ちたい」という興味・関心を広げた。

○生活空間（環境）の整備

各種活動に取り組む中での、子どもたちの掃除・整理整頓活動への気づきに対して、子ども用の掃除道具を準備したり、片付け場所に、整頓された状況がわかるような写真を示したりして、意欲がわきやすいように工夫した。

「きれいにする」（環境整備）ことに関心をもち、「きれいにすると気持ちがいい」という気づきから、「散らかさない、汚さない」ことを考え、子どもなりに少しでも実践できるよう願っている。

○野菜大好き（種まきから食べるまで）

砂場の遊び道具を使って、畑の手入れ、種まき、水やり、虫取り、草取り等の世話をした。

野菜の成長を見守り、自分たちで一所懸命育てた野菜の「いのち」を食べる特別な思いが、好きな（食べることでできる）野菜の種類が増えることにもなり、また、子どもたちの食育にもつながっている。

○「家族で取り組もう！」

家族でできるボランティアの一環で、ペットボトルのキャップや古切手、プリペードカードを集めるとどのようなこと（協力支援）ができるかを具体的に知らせた。身近な物でもできる、自分たちでも皆で集めたら支援できることがあることを、子どもにもわかりやすく意欲がわくよう伝えるようにした。

活動の成果

- 今回モデル校の指定を受け、改めて、子どもたちや教職員、保護者のボランティアに関する意識や、「気づき・考え・実行する」態度への関心が高まった。

「貧しく困っている人たちが世界にはたくさんいることを知り、どうしたらよいか親子で考えた」、「子どもが街頭募金の呼び掛けを体験し、思いやりの心がより強くなったと感じた」、「これからも、親子でボランティアに目を向けていこうと思った」という保護者の感想もあり、園での活動から、家庭へと広がり、積極的に行動する家族が増えたと感じている。

- テレビニュースや、掲示板の新聞、フォトニュース等で見たたり聞いた外国の国の名前に関心をもち、地球儀や国旗の絵カードを見て自分なりに調べて確認するなど、色々な国の様子を知らたがる子どもが多くなった。

特に、災害のニュースを紹介すると、「何かできることはないかな」という発言も聞かれるようになった。開発途上国の子どもの様子を知ることで、予防注射のためのペットボトルのキャップや、医療支援のための古切手、プリペードカード等を持ってくる子どもも増えた。

- 野菜の栽培をととして、種から育てた野菜に愛着を感じるとともに、喜んで食べ、感謝する気持ちを育むことができた。

また、野菜をプレゼントしたお年寄りから感謝の言葉を聞き、また野菜を育て、お年寄りに喜んでもらい元気になってもらおうと意欲にわく子どもも多く見られた。後日、近所のお年寄りからは、折り紙の人形や花をいただいたり、幼稚園の行事に来られるなどして交流の場も増えた。

さらには、育てた野菜を収穫し、クラスでの料理に使用することで、食べ物「いのち」をいただくことを実感し、好き嫌いが減り喜んで食べるようになった。週2回の給食の食べ残しも減った。

- 特別養護老人ホーム「あいこう」のお年寄りとの交流で、目や耳が不自由であるなど、お年寄りの体の弱いところに気づき、関心をもって接するようになり、どのように伝えたらよいかを考え、身振り・手振りや、耳元で話したりして、思いやりの気持ち・態度が育っていった。

- 青少年赤十字のワッペンをもらったことで、こども赤十字メンバーの一員であるという気持ちが芽生え、よい行いをしようと

する意欲が高まり、ワッペンを着ける喜びと誇りを感じながら積極的な行動ができるようになった。

- 生活の中の小さな気づき（困っている人がいる、逆さまに片付けられた本、落ちている紙くずやご飯粒、乱れたトイレのスリッパ等々）から、どうしたらよいかを自分で考え行動できる子どもが増えた。また、一人でできないときは、友だちに声を掛け、仲間を募ったりしている。

モデル校指定後の変化

- 自分のこと（体や健康）だけではなく、家族の健康からお年寄りの体のことまで関心をもって接するようになった。

- 社会の一員として、幼児なりに地域や自分の国、世界に目を向けるようになってきている。「自分のことは自分でできるから、困っている人に対して、自分に何かできることはないだろうか」と意識をし、実際に行動する子どもが増えてきた。また、情報も受け身だけではなく、家族で話題にしたことなどが子どもの方から発信されることが出てきた。

- モデル校指定前後の一番大きな変化は、幼稚園の日ごろの保育活動に青少年赤十字の実践目標を掲げ、子どもたちの自主・自立した生活態度を養うために、「気づき・考え・実行する」態度目標を根底においたことで、子どもたちから「小さな気づきの発言」が多くなり、自主的な行動ができるようになってきたことである。

- モデル校の実践報告会開催（赤十字関連の基調講話、炊き出し体験など含め）の波及効果で、地域から、小中学生にも災害時の活動体験をさせたいという声が上がリ、平成23年度の地域行事に、子どもの災害支援活動体験が組み込まれることになった。このような事例や活動の積み重ねが、赤十字や青少年赤十字への理解・協力につながっていくと思われる。

今後の取り組みの見通し

- これからも、態度目標の「気づき・考え・実行する」ことができる大人（指導者や保護者）、子どもになれるよう、引き続き「小さな気づき」を大切に、子どもの意欲やアイデアを生かした保育活動を進めていきたい。

また、幼稚園から、保護者や地域の方々に向けて、赤十字の情報発信とともに、一緒に取り組むことのできる協同活動を考えてみたい。

選考員のコメント

幼稚園の日常生活で出会う人とかかわり合いの中で、思いやりのある気持ち、主体的に奉仕活動に取り組もうとする子どもの基礎を育成することをねらいとした素晴らしい取り組みである。これまで行われてきたことも赤十字の活動を基盤としながら、自らが気づいた活動の実践を積み重ねるといった創意工夫された取り組みである。幼稚園の小さな子どもたちが、「小さな気づきから行動へ」の話し合い活動、街頭募金、花いっぱい活動、あいさつ活動、野菜づくり活動、老人ホーム訪問、中学校とのエコキャップ共同活動等の多くの活動を展開できたことは、先生方や保護者の皆様のご指導・ご協力のお陰です。皆様に感謝申し上げます。

小 学 校 の 部

Elementary
School



思いやりの心を育てる青少年赤十字活動

日常の活動を通して「気づき、考え、実行する」態度を育てよう。

岩手県 盛岡市立大慈寺小学校

活動の種類	活動の単位	活動期間	教育課程上の主な位置づけ
健康・安全、奉仕、国際理解・親善	全校	通年	各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間

活動のねらい

教科及び各領域において「気づき、考え、実行する」という青少年赤十字の態度目標を生かしながら学習し実践する活動を通して、学校や社会のために奉仕しようとする意識と思いやりの心を育てる。

具体的な活動内容

1. JRC 登録式

5月上旬、JRC のメンバーとしての自覚と活動への意欲を持たせるために、児童朝会の時間に JRC 登録式を行った。初めに JRC 委員会から、青少年赤十字の目的やそれを達成するための3つの柱についての発表を行った。次に新加入者へ青少年赤十字のバッジが交付され、児童会長のあとに続いて「誓いの言葉」を全員で唱和した。そのあと日本赤十字社岩手県支部の職員に、JRC の理念や活動していく上での心構えなどを、わかりやすく丁寧に教えていただいた。最後に「空は世界へ」を全員で斉唱し、今年度の JRC 活動のスタートにあたっての意欲づけとした。



登録式

2. VS 活動

本校が伝統的にしている活動で、挨拶・ごみ拾い・机や本棚の整頓等自分が取り組もうとする活動をカードに記入し、それが実行できた時カードにシールを貼るというものがある。JRC 委員が月毎にシールの枚数を集計し昼の放送で発表したり、朝の会や帰りの会で VS 活動を呼びかけたりすることにより、意欲的に活動に参加する児童が増えてきている。また、11月には JRC 委員会が呼びかけて「VS ピンゴ」の活動を行っている。これは、縦横3マスずつのカードに自分が取り組むと決

めた9つの活動を記入し、それが全部できたら2枚目のカードにまた記入していくというものである。1ヶ月取り組んだあと JRC 委員が集計し、枚数の多かった児童を学年毎に表彰するので、児童は楽しみながら意欲的に活動に参加している。

3. フォスタープランへの協力

フォスターチャイルドであるケニアの小学生に募金を送る活動で、毎月第2週に JRC 委員会が各学級を回り募金を呼びかけている。集まった募金は委員会が集計して入金し、3ヶ月に一度引き落とされケニアに送金されている。ケニアからは年に一度その地域の様子を知らせる資料が届くので、それらを紹介しながら国際理解に努めている。

4. PTA と合同の地区清掃

保護者や地域の方との交流を深めたり、地域の環境美化のために自分たちで何ができるかを考えることをねらいとして、8月末 PTA と合同で地区の清掃活動を行った。地域を清掃して歩くことにより、自分たちの地域を大切にしようとする思いが深まり、みんなと協力して活動を行おうとする態度も育ってきている。

5. ふれあいランドでの福祉体験

6月末、総合的な学習の時間で6年生がふれあいランドに行き福祉体験活動を行った。施設内を見学したあと点字ブロックや特別なトイレなどの説明を受け、障がい者に対する理解を深めることができた。次に、目かくしをした状態で白杖を頼りに施設内を歩く活動や、目の不自由な人に会ったときの対応の仕方を友達同士で体験しあった。最後に車いすに交代で乗りながら、いろいろな場所を移動する大変さを体験することができた。

6. リーダーシップ・トレーニング・センターへの参加

7月末、日赤岩手県支部主催の研修会に、2泊3日の日程で5・6年児童が2名ずつ計4名参加した。その活動の中で青少年赤十字に対する理解を更に深め、夏休み終了後報告会を行うことによって、その成果を全校児童に広めることができた。



リーダーシップ・トレーニング・センターでの発表

7. アーラム大学短期留学生との交流

10月中旬、8月から日本にホームステイしているアーラム大学短期留学生12名との国際交流会を行った。児童は最初不安や戸惑いの表情を見せていたが、グループに分かれて交流しているうちに会話もはずむようになり、最後は時間が足りないくらい盛り上がって交流会を終えることができた。

8. 原敬墓所清掃

毎年、原敬の命日の前に、原敬の墓所の清掃活動を高学年で行うことにより、奉仕の心を育てたり偉大な先人への思いを深めたりすることができると考えている。



墓所の清掃

活動のポイント

- ・JRC登録式に日赤岩手県支部の職員を講師としてお招きし、JRCの理念や活動していく上での心構えなどを話していただいた。
- ・VSカードやVSビンゴの取り組みをすることにより、児童が自分から進んでVS活動を行う姿が多く見られるようになった。

活動の成果

- ・VS活動が日常の活動として定着するよう、児童会執行部やJRC委員会が中心になりポスターや昼の放送で働きかけ、自分から進んで良いことや人の役に立つことをしようとする気持ちが、児童一人一人の中に浸透してきた。
- ・体験活動や交流学习を通して様々な立場や考え方を理解することができ、相手を思いやることや協力することの大切さを学んだ。国際的な視野を広めたりするのに大変良い機会となった。
- ・保護者や地域の方と一緒に活動することにより、自分たちが住んでいる地域を大切に、みんなで守っていこうとする気持ちを育てることができた。
- ・モデル校として指定を受けることにより職員間の意識が高まり、より連携していろいろな活動に取り組むことができた。

モデル校指定後の変化

- ・児童会執行部を中心としたあいさつ運動がさかんになり、全校児童が進んであいさつする姿が多く見られるようになってきた。

- ・フォスターチャイルドやその地域の様子などの情報をより詳しく提示したり家庭に配布したりすることにより、募金活動の意義やその地域についての理解を深めることができた。
- ・VS活動に対する取り組みを、ポスターや昼の放送・帰りの会などで呼びかけることにより、自分から進んで良いことや人の役に立つことをしようとする気持ちが高まった。
- ・原敬墓所の清掃や落ち葉はき・雪かき等の活動を進んで行うように声がけすることにより、感謝の気持ちを持って進んで働く児童の姿が多く見られるようになってきた。

今後の取り組みの見通し

- ・児童会執行部とJRC委員会を中心とした日常活動をより明確に位置づけ、「気づき、考え、実行する」という目標が全校児童一人一人のものになるようにする。
- ・「健康・安全」「奉仕」「国際理解・親善」の活動内容をもう一度見直し分類することにより、全校体制での更なる共通理解を図り、より活発な活動ができるようにする。
- ・今後も日赤岩手県支部や青少年赤十字賛助奉仕団の協力を得ながら活動を展開し、青少年赤十字に対する理解をより深めていくようにする。

選考員のコメント

ボランティア教育全体計画の中に、青少年赤十字活動を位置づけ、各教科等の指導との関連を図りながら実践活動を行っている素晴らしい取り組みである。教科等において、「気づき、考え、実行する」という青少年赤十字の態度目標を生かしながら学習し実践する活動の中で、工夫したVS活動の「VSビンゴ」は児童の具体的な実践として、学校や社会のために奉仕しようとする意識と思いやりの心を育てる効果的手法である。また、「フォスタープラン」への協力は、「国際理解・親善」の実践目標を具現化した双方向の活動として、国際理解の一助となる活動である。

小さな貢献、大きな奉仕

外国の子どもたちへの優しさ同様にクラスの友達にも

東京都 杉並区立和田小学校

活動の種類	活動の単位	活動期間	教育課程上の主な位置づけ
健康・安全、奉仕	学年 全校	通 年	総合的な学習の時間

活動のねらい

児童の実態、地域の特性から、重点目標の具現化として、体験的活動を通し、国際理解の観点に立ち、保護者ぐるみで赤十字活動に取り組むことで「思いやりの心」を育てている。

具体的な活動内容

①春・秋の交通安全週間に合わせた「挨拶週間」【4・9月】

年度始めと二学期はじめの交通安全週間に、青少年赤十字の黄色のスカーフ（日本赤十字社東京支部、地域奉仕団作成）を首に着用して、地域の方や交通安全指導員に積極的に挨拶することを励行し、地域の一員であることを自覚させた。

②「命の教育」としての体験学習【6月】

杉並区の六月に推奨している「命の教育月間」に合わせて、日本赤十字社東京都支部から講師を招き、中学年に「視覚障がい者疑似体験」、高学年に「高齢者疑似体験」を体験学習として実施し、支援を必要とする人への理解を深めた。

③「水辺の安全教室」【8月】

本校、おやじの会（子どもの育成と支援をする保護者の支援団体）との共催で、プールでのカヌー体験や水難者の救助法、ロープワークを通して、水に関わる安全と基本的な知識を学んだ。



水辺の安全教室

④国際理解と国際貢献【10・1月】

日赤東京都支部の国際貢献・奉仕事業である「ジンバブエギフトボックス」「モンゴル救援衣料」に計画委員会を中心にポスター作り、箱詰めなどを行い、自分たちの豊かな生活を知ると共に、国によっては生活に、生きることに大きな課題があることを知った。共に、PTA 活動も協力してもらい、保護者への理解啓発も推進した。



モンゴル救援衣料

⑤知的障がい者のサッカー事務局長の講演会【11月】

本区の臨床心理士でもあり、全国の知的障がい者のサッカー協会の事務局長である方に、広い視野での保護者向け講演会を実施し理解啓発を進めた。演題「国境も障がいも越えた障がい者スポーツ」

⑥地域清掃を通した奉仕活動【11月】

落ち葉の多くなる11月に、町会の方々の協力も得て、落ち葉集めと同時にゴミ収集・分別を中・高学年が実施し、地域の一員であることの自覚を促した。

⑦病院訪問を通した奉仕活動【2月】

学区域のホスピスも設置している病院を訪問し、高齢の入院患者病棟を中心に、中学年がミニコンサートを開催し交流することで、児童に高齢者へのいたわり、理解を深めた。

⑧高齢者団体との交流活動【2月】

隣接する区民集会所を利用する地域の高齢者団体の活動日に合わせて、低学年が訪問交流することで、核家族化が進む児童に高齢者とのかわりを通して、思いやりの心を育てた。

⑨保護者・地域ぐるみの「エコキャッププロジェクト」

昨年度の計画委員が提案した「エコキャッププロジェクト」を、今年度より赤十字活動の一つとして位置付け、全校、通年、保護者・地域を巻き込んだ取り組みとし、子どもたちの赤十字活動へのモチベーションをあげている。平成22年3月現在、20万個の収集となり、おやじの会の協力も得て、エコキャップ推進委員会に搬入した。次年度は、地域の公的施設にも声掛けをし、町ぐるみの取り組みとして、学校はもとより地域の活性化も目指したい。



エコキャッププロジェクトで集まったキャップ

活動のポイント

○赤十字の活用

黄色のスカーフ着用は児童の意識付けにとっても有効である。今後は、校外学習時の着用も安全面から検討している。

○工夫

校長室前に、赤十字用の掲示板を設置し、常に情報発信が出来る環境を整えた。

○赤十字以外の活用

PTA・おやじの会、エコキャップ推進委員会、町会・商店会

活動の成果

1. 助成金が頂けた事で、活動が見える形が変わりつつある。

- ・病院訪問コンサートに使用する手持ち楽器を購入。
- ・エコキャッププロジェクトの啓発ポスターの作成、収集ボックスの購入、設置。
- ・校舎内に、赤十字専用の掲示板を設置。

2. 児童、保護者、地域住民のモチベーションが高まりつつある。

学校便りやホームページを通して、赤十字活動の取り組みを発信し、モデル校としての自覚を高めることで、赤十字活動へのモチベーションが高まってきた。

3. 外国への意識の目が高まった

偶然にも、平成 22 年度に JICE (財団法人 日本国際協力センター) からの依頼で、中国教育視察団とモンゴル教育視察団を二回を受け入れることになったが、子どもたちは臆せず国際交流を頼むことができた。訪問者も赤十字のポスター等を見て、コミュニケーションのきっかけとしていた。

モデル校指定後の変化

【比較変化】

モデル校指定を受ける以前から、青少年赤十字加盟校として活動してきたが、明確な目的意識がなかったのは現実である。型通りの募金活動、マンネリ化した広報活動であったが、今回のモデル校指定を受けて大きく変容した。

まずは、多額の助成金の有効活用を意図的、計画的に考えることで、赤十字活動の本来の趣旨である、奉仕・貢献の理念の具現化を図ってきた。2 年間のモデル校指定を受けて、自分たちは赤十字活動の一員である認識が高まり、従来の活

動に関しても意識の高揚が見られた。また、この間の新規事業に関しても、積極的・自主的な取り組み姿勢が見られた。同時に、地域・保護者も本校が赤十字活動のモデル校であることを知り、信頼構築の一助となった。

【その成果】

- 児童が国際理解の観点に立ち、諸外国の事情に感心が高まった。また、外国人訪問者に対して自然な形でコミュニケーションがとれていた。
- 本校での取り組みが JICA (独立行政法人国際協力機構)、JICE とも連携し、中国やモンゴルの教育視察団受け入れが実現された。
- 児童の隣人に対する温かい心、優しい心の育成の契機となった。また教職員にとっても奉仕・貢献の意識が高まり、東日本大震災に対してのボランティア活動の高い割合での参加が見られた。

今後の取り組みの見通し

従前の以下の取り組みを継承しつつ、エコキャッププロジェクトを地域ぐるみに発展し、「めざせ 100 万個」をキャッチフレーズに、地域の活性化も目的とする。本プロジェクトは杉並区教育委員会も支援を表明している。

- ①春・秋の交通安全週間に合わせた「挨拶週間」【4・9 月】
- ②「命の教育」としての体験学習【6 月】
- ③「水辺の安全教室」【8 月】
- ④ジンバブエギフトボックス【9・10 月】
- ⑤国際理解と国際貢献【10・1 月】
- ⑥知的障がい者のサッカー事務局長の講演会【11 月】
- ⑦地域清掃を通した奉仕活動【11 月】
- ⑧モンゴル冬季救援衣料【1 月】
- ⑨病院訪問を通した奉仕活動【2 月】
- ⑩高齢者団体との交流活動【2 月】
- ⑪保護者・地域ぐるみの「エコキャッププロジェクト」

選考員のコメント

児童の実態や地域の特性を生かし、体験的活動を通して、国際理解の観点に立った地域ぐるみ・保護者ぐるみで赤十字活動を展開している取り組みである。学校や地域の関連事業を自然に活動に結びつけた内容が素晴らしい活動で特色ともいえる。地域に根ざした青少年赤十字活動が展開されている。特に、「交通安全週間と挨拶運動」、「命の教育」の体験学習、「水辺の安全教育」、「ジンバブエギフトボックス」、「モンゴル救援衣料」、「地域清掃」や「病院訪問」の奉仕活動、高齢者団体との交流活動、「エコキャッププロジェクト」等々の実践活動を通じて、児童に思いやりの心が着実に育っていることが窺える。

ボランティアサービス精神を 一人一人の子どもがもち、実践につなげるために

健康な体・柔軟な心・国際社会を見つめる目を育てる

徳島県 徳島市千松小学校

活動の種類	活動の単位	活動期間	教育課程上の主な位置づけ
健康・安全、奉仕、 国際理解・親善	全校	通年	教科、道徳、総合的な学習の 時間、外国語活動、特別活動

活動のねらい

情報化・国際化が進む現代社会の中で、子どもたちの人間関係は希薄化し、命の尊厳が失われつつある。積極的に他とかかわろうとしなくても困ることのない生活を送ることは、今何をすべきか分からない無気力な自分をつくり、自尊感情が低く自分を大切にできない子どもを生み出すことになる。

県下一のマンモス校である本校も、たくさんの友達に囲まれながらも、積極的にあいさつができなかったり、自分の思いや考えをはっきりと伝え、行動に移せなかったりする子どもが多い。

そこで、人とかかわりを大切にし、共に学びあう中で、ボランティア精神を育み、自発的に実践できる子どもを育てたいと考えた。これまでの全校的な取り組みのもと、各学年の総合的な学習の時間や生活科において、実践目標を重点化した活動を行うことで、意識を高め、実践化を図った。

具体的な活動内容

青少年赤十字の実践目標である、①健康・安全（生命と健康を大切に）②奉仕（人間として、社会のため、人のためにつくす責任を自覚し、実行する）③国際理解・親善（広く世界を知り、仲良く助け合う精神を養う）を横断的に達成することができるよう、各学年で主に取り組む目標を設定し、活動を行った。

〈各学年での取り組み〉

低学年①健康・安全・（親善）…テーマ「自分・友達を見つめて」

中学年②奉仕…テーマ「地域を見つめて」

高学年③国際理解・親善…テーマ「世界を見つめて」

《低学年》

◎第1学年「げんきなからだ」

養護教諭・歯科衛生士の方と連携を図り、「歯磨き指導」を行った。子どもたちは、歯垢染め出し液で歯の汚れを実感したあと、歯科衛生士から正しい歯磨きの知識を得た。歯の大切さに気づき正しい歯磨きに取り組むことができた。

また、道徳では「これくらい」という資料を用いて授業を行った。「これくらい」と思って危険なことをせず、安全に気を付け、自分の命は自分で守ろうとする態度が育ってきた。

◎第2学年「わくわくフェスティバル 2010」

「1年生やひまわり（特別支援学級）の友達を招待しよう」と、昨年の招待された経験を振り返り、計画を立てた。準備を進めていく過程で、より楽しんでもらえるお店にしようと、友達と話し合いながら作り上げていくことに重点をおいて活動を進めた。遊び券・招待看板作り、事前の説明など、子どもたちの力でフェスティバルを創り上げていくように支援した。また、フェスティバルへの後には振り返りの時間を設定し、自分たちのがんばりや仲間のよさを実感できるようにした。



わくわくフェスティバル

《中学年》

◎第3学年「クリーン大作戦」

社会科の町探検で、自分たちの大好きな町にたくさんのゴミが落ちていることに気づいた子どもたち。「自分たちにはできないことはないか。」と考え、「一人1個のゴミ拾い運動」をまずは校内から始めることにした。その後、校外学習の機会を利用して地域のゴミ拾いにも取り組み、ゴミの多い場所を校区地図に書き出すことで、改めて「自分たちができることから始めて、町を美しくしよう」という意識を高めることができた。

◎第4学年「共に生きる」

障がい者の生活などについてのビデオを観て、障がい者と共に生きていくために、どのような学習をしていきたいかを考え、話し合った。その後、地域の「障がい者交流プラザ」の見学を通して、障がい者に対する施設の工夫や、そこを活用している人について知ることができるようになった。そして、実際にアイマスク・車椅子・点字を打つ体験など

をすることで、視覚障がい者・身体障がい者の立場に立って、自分たちができることは何かを考えることができるようになった。さらに、ほとんど目の見えない小学校教員 K さんや「徳島車椅子バスケットボールの会」の皆さんの話を聞いたり、調べたことを質問したりすることを通して、生活上の不便はあるが、自分たちと変わらないということを理解し、障がい者に対する見方・考え方が大きく変わった。明るく元気にスポーツや仕事に取り組む障がい者の姿から、自分の生活を見直すことができた。



車椅子体験

《高学年》

◎第5学年「世界の食を知ろう」

外国語活動の学習により、世界に少しずつ目が向き始めている子どもの実態を捉え、世界の食を調べる学習を行った。自分たちの国や地域の食について誇りをもつと同時に、世界の様々な文化の違いを食を通して知り、より国際理解への意

識が高まった。また、フィンランドからの留学生を招き、英語で話を聞き取ったり簡単な質問をしたりする活動では、英語で会話できる喜びを体感していた。自分の国のよさを英語で伝えたいという思いを強く抱くことができていた。

◎第6学年「世界の子どもとつながろう」

外国人のゲスト5名（内モンゴル・シリア・バングラディシュ・ドイツ・アメリカ）を招いて国際交流会を開いた。子どもたちはゲストとの交流を通して、日本とそれぞれの国との違いに気づきながら国際理解を深めていった。同時に、世界の国々が抱える課題を知った子どもたちは、平和な世界の実現のために、自分たちにできることは何か、どう考え生きていくべきかなど、人権を柱に学習を進め、自分たちの考えを交換し合うことで、国際社会の一員としての自覚をもった。



世界の子どもとつながろう

全校での取り組み(行事・集会)

	健康・安全	奉仕	国際理解・親善
常時	- 朝の健康観察 - 生活指導(月目標) - 交通指導(長期休業日前)	- 毎朝の清掃(クラス輪番制) - 朝のVSタイム(クラス独自) - アルミ缶トレイ回収(委員会) - 古切手回収(各クラス) - ボランティアサービスノート(委員会) - 読み聞かせボランティア	- あいさつ運動(委員会・高学年クラス輪番制) - お楽しみ会(委員会・縦割り班) - 朝の外国語活動(低・中学年)
4月			1年生を迎える会
5月		JRC登録式	
6月	交通安全教室／自転車教室／体操発表会がんばれ集会		
7月			1円玉募金
8月	田宮川水質検査	稚魚放流／地域の清掃ボランティア	
9月	避難訓練		
10月	運動会		
11月			敬老の日のお手紙
12月			海外歳末助け合い募金
1月	避難訓練		書き損じ葉書・未使用切手回収
2月	おはようかけ足／なわとび名人会		アルミ缶回収収益金贈呈式
3月		東北関東大震災義援金	6年生を送る会

活動のポイント

(活動上のポイント)

子どもたちが自ら、「気づき・考え・実行する」ことができるよう、活動の場を仕組んだり人材を確保したりした。

また、委員会活動ではボランティアサービスカードを活用し、自分の学校生活を振り返り、困っていることはないか、そしてそれを解決するためにできることは何かを考える場を毎回設定した。

(ご協力いただいた人・団体)

- ・地域の敬老会
- ・赤十字救急法指導員、赤十字奉仕団加茂分団、徳島県障がい者交流プラザ内視聴覚障がい者支援センターの職員
- ・視覚障がいのある小学校教員 K さん
- ・「徳島車椅子バスケットボールの会」の皆さん
- ・TOPIA (徳島国際協会)

活動の成果

- 各学年において、総合的な学習・生活科の大きな柱に青少年赤十字の実践目標を据え、重点的に活動した。これまで行っていた全校での活動とつながりが生まれ、子どもたちが「気づき」「考え」「実行する」ということを意識して、主体的にボランティア活動に取り組むことができた。
- 委員会活動では、ボランティアサービスカードを使用し、生活の中での気づきを委員会での取り組みに生かすことができるようになった。その中で新たに、朝のあいさつ運動や縦割り班でのお楽しみ会などが新たな活動として実践化された。
- 職員研修で赤十字の理念や精神、活動例について学ぶ時間を持ち、全職員が「ボランティアの四原則」に立ち戻り、職員から子どもたちへ赤十字の精神が行き届くことができた。
- 国内外の自然災害(地震・津波・洪水など)などに対する関心が高まり、助け合いの精神で募金活動を子どもたちから始めることができた。

モデル校指定後の変化

- ・子どもたちの活動に必然性をもたせようと活動計画を立て直すなかで、指導者間の共通理解が得られ、連携がより密接に図られるようになった。
- ・どの活動においても、子どもがニーズを発見することから出発できるような活動案を考えることができるようになった。
- ・子どもたちが、身の回りの自分にできる小さなことから実践に移すことができるようになってきた。(ボランティアサービスカードを委員会活動で使用)
- ・地域や外国人とのかかわり合いを取り入れた活動を設定することができた。
- ・助成金での清掃道具の補充により、朝の清掃ボランティア活動が充実した。
- ・助成金で車椅子などを購入し、子どもたちの体験活動が充実したものになり、より意識を高めることができた。

今後の取り組みの見通し

2年間の実践を通して、子どもたちが生活の中の問題点に気づき、少しずつ自分なりの解決方法を見だし活動できるようになってきた。しかし、まず身近な問題に気付くという活動を重視すると、教師の助言が多くなり、自ら気づくまでにいたらない。また、考え実践する過程では、自分でどの方法がよいかという自己決定力までは育っていない。

今後は、より実践力を高めるために、何が問題点で、どうすればよりよい方法で解決できるかを更に実践を通して身につけさせていければと思っている。教師自身も、子どもの「気づき」を「待つ」こと、「考え」「実践する」まで「待つ」ことを大切にし、子どもの中に本当のボランティア精神が育つよう支援していきたい。

そして、これからも子ども・教師・地域が一つとなって様々な活動に取り組んでいきたい

選考員のコメント

徳島県下一のマンモス校での実践報告である。大規模校で全校や学年で活動を行うことは、かなりのきめ細かい計画が必要である。青少年赤十字の実践目標である3つの領域を低・中・高学年で分担した活動展開に工夫を感じた。各学年でテーマを絞り込み、活動範囲を限定した取り組みである。児童会活動の委員会活動で、「ボランティア・サービス(V・S)」カード(ノート)を活用し、V・Sの問題解決5段階法を生かした活動は大規模校ならではの活動であると実感した。子どもたちが自ら、「気づき、考え、実行する」ための場の設定によって、人とかかわりを通して、共に学び合う中で、ボランティアな生き方を学んできたことを感じ取ることができた。

気づき、考え、たくましく活動する児童の育成

総合的な学習の時間・委員会活動を中心として

愛媛県 今治市立日高小学校 ひたか

活動の種類	活動の単位	活動期間	教育課程上の主な位置づけ
健康・安全、奉仕、国際理解・親善	全校	通年	生活科・総合的な学習の時間を中心に全教育活動を通じて

活動のねらい

総合的な学習の時間や生活科、異年齢集団活動などさまざまな場面で、人や地域とかかわる中で、身の回りの課題に気づき、その解決方法を考え、意欲的に実践できるたくましい児童を育てる。

具体的な活動内容

(1) 学習研究部の取り組み

ア 各学年の総合的な学習の時間・生活科での取り組み

- 「気づき、考え、実行する」流れを重視した学習展開の工夫
- 地域や人とのかかわりを大切に体験活動の工夫
- 「健康・安全」「奉仕」「国際理解・親善」の視点での系統立て

イ 他教科等での取り組み

- 問題解決的な学習展開の工夫
- 総合的な学習の時間・生活科・道徳・特別活動と連携した年間計画の作成

ウ 活動の実例（4年生総合的な学習の時間

「笑顔いっぱいすてきな日高小」の事例）

〈気づく〉

単元の導入において、ブレインストーミングの手法を使い、「すばらしい人」とはどんな人か考えた。児童は友達への考えに触発され、思いついたことをどんどん書いていった。児童は、「よりよい日高の生活」を「清潔で快適な生活、安全な生活、仲よく優しさのある生活、気持ちのよい生活、一生懸命がんばれる生活」だと考え、これらの生活を支えている人を「すばらしい人」だととらえた。

次に、本校に読み聞かせに来てくださっている図書ボランティアの方の話を聞き、ボランティアをする人の思いに気づいた。さらに、自分たちが見つけた「すばらしい人」を調べ、学年の友達と紹介し合い、地域でボランティアをしているたくさんの人の存在を知った。これらの活動を通して、ボランティアの意義に気づき、ボランティア活動への興味が高まった。



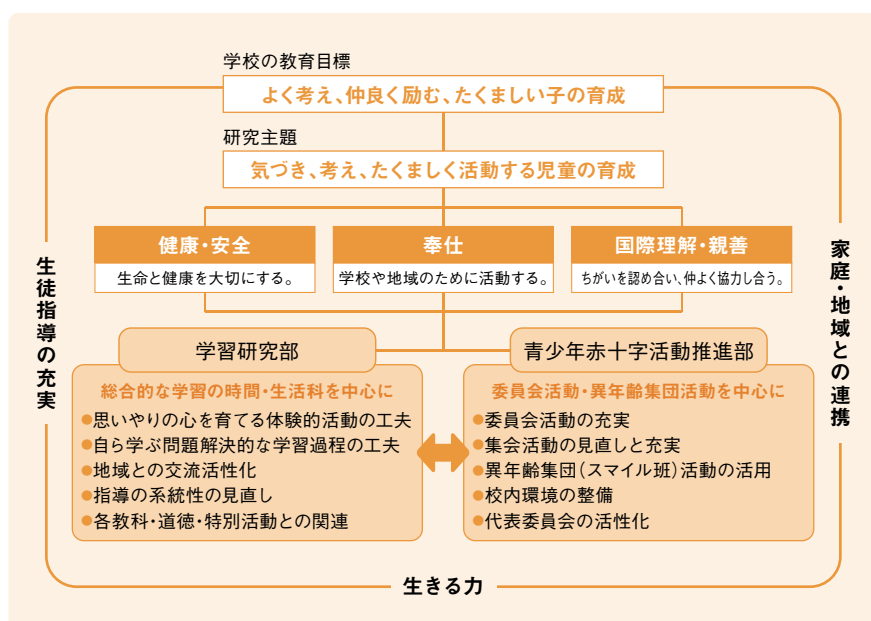
ブレイン・ストーミング

児童の感想より

・Aさんの読み聞かせは、気持ちがかもっているなと思いました。わたしもAさんみたいに読み聞かせができればなと思いました。

・Aさんはとても読み聞かせが上手だったので、とても楽しくなって、もっと聞きたいなと思いました。わたしも本が大好きなので、ほかの人にも本を好きになってほしいです。

・Aさんが言っていたボランティアの「バトン」をもらったような気がします。



〈考える〉

予備リサーチでの「気づき」をもとに、「何とかしたい」という願いを全体のテーマとしてまとめ、活動のゴールを決めた。そして、同じ思いや願いをもつ友達とチームを作り、具体的にどんな提案をしていくか決めた。さらに、ゴールにたどり着くためにはどうしたらいいかを考えてチームの「計画表」を作った。その際、各チームの提案を聞き、取り入りたい点、一緒に協力したい点などについて気づかせ、自分たちの考えに深みをもたせてから、チームの話し合いに入らせた。チームの話し合いでは、計画カードを用い、一人一人の考えを大切にしながら、活動内容や順序について計画できるようにした。また、使える時間や活動の重要度を考えられるように支援し、実行できる計画にさせることにより、活動への意欲と実感が高まった。

〈実行する〉

計画表をもとに、チームワークを発揮して協同的に活動した。ポートフォリオを活用し、全体の流れやタイムスケジュールを意識して活動した。児童は、自分の活動を振り返って自己評価し、計画を修正しながら活動に取り組んだ。また、活動の随所で4年生会議を設けて情報交換を行ったり、中間報告会を開いて活動の経過を知らせ、アドバイスし合ったりした。

活動のまとめとして、プレゼンテーション「聞いてよ！わたしたちの考え」を行い、保護者や異学年の児童に自分たちの活動内容や考えを発表した。さらに、「日高小〇〇隊活動ブック」を作り、各家庭や地域の施設に届け、意見を聞いた。



チームの活動

(2) 青少年赤十字活動部の取り組み**ア 委員会活動の活性化**

- 「気づき、考え、実行する」意識を大切に活動の見直し
- 全校児童の意識を高める集会活動

イ 異年齢集団活動（スマイル班）の工夫

- 高学年のリーダーシップと責任感を育てる栽培活動
- ボランティアサービス（V・S）活動や遊びなど様々な場面での異年齢集団の活用

ウ 環境整備の工夫

- 「気づき、考え、実行する」意識を高める掲示の工夫
- 心を育てる「コスモスロード」の整備をはじめとする花の栽培

エ「がんばる日高の子」週間の実施**オ 家庭・地域との連携****(3) 活動の実例（給食委員会の事例）****ア 常時活動**

今日の献立や食材の栄養、季節の行事などを放送するとともに、献立黒板に掲示し、給食後の片付けを手伝っている。給食の片付けの際、食器の片付けがきちんとできているか調べたり、残食をしないように呼び掛けたりするなど活動が広がっている。

イ 集会活動**「早ね、早起き、朝ごはん」集会**

朝食を食べたときと食べないときでの学習への集中度の違いをグラフで示し、朝食を食べることは、体温を上昇させ、脳エネルギーのもととなり、学習に集中できることを知らせた。また、ビタミンや食物繊維をとることはイライラをなくし精神の安定にもつながることなどを簡単な劇にして発表した。そして、「はやおきマンたいそう」の歌に合わせて踊りながら、早起きをしてバランスのよい朝食を摂ることの大切さを全校に呼び掛けた。

「好き嫌いをなくそう」集会

全校で、偏食に関するアンケートを行った。トマトやピーマンなどの野菜が苦手な児童が多いという結果から、野菜の働きを知らせ、いろいろな野菜を摂ることの大切さを全校児童に呼び掛けた。また、好き嫌いをなくそうという趣旨の「給食の歌」を作り、2年生の代表児童や集会委員会の児童と一緒に楽しく身体表現しながら全校合唱をした。そして、赤・黄・緑の食品をバランスよく摂ることにより、健康な体を保持することができることを知らせた。



給食の歌の発表

ウ 考察

給食委員会の常時活動は、工夫のできにくいものであるが、「気づき、考え、実行する」という意識付けによって自分たちができることを考え、毎月全校の片付けや残食の様子について調べたり、クラスの中で手洗いの励行やごみ拾いを呼び掛けたりするなど活動を工夫することができるようになってきた。

活動のポイント

総合的な学習の時間や生活科、日常生活などあらゆる場面で「気づき・考え・実行する」ことを意識付けさせることで、様々なことに気づこうとする意識が高まっており、実践へとつながられる児童も増えている。

活動の成果

今回、青少年赤十字の研究指定を受け、改めて本校の活動を見直してみると、青少年赤十字の実践目標「健康・安全」「奉仕」「国際理解・親善」につながる活動が数多くあることに気づいた。そこで、これまで、それぞれ単独で目標を立て、実践してきた活動を、青少年赤十字の態度目標である「気づき、考え、実行する」という共通の目標を立て、実践することとした。それによって児童の意識の中でもバラバラであった諸活動に一貫性をもたせることができる。さらに、それらの活動が自己を成長させるとともに、「人のためと郷土社会のため」「国家と世界のため」の活動につながっていくことを意識することで、より意欲的な活動ができると考えた。そして、豊かな感性や行動力を育て、本校の児童に身に付けさせたい「たくましさ」を育成することに効果的であると考えた。

また、本校は平成 21 年 10 月に「愛媛県 青少年赤十字研究会」を実施した。助成金を利用して看板などの環境を整備して、児童への意識づけを行うとともに、今治地域への啓発にもつなげることができた。

モデル校指定後の変化

- ・これまで行ってきた活動を青少年赤十字の 3 つの実践目標に照らし合わせて見直し、より充実した活動になるよう改善を図った。
- ・「気づき・考え・実行する」を柱に、児童・教師の意識を高めるように研修や児童集会を行った。
- ・平成 22 年 3 月の東日本大震災の際にも、6 年生を中心に自主的に募金活動を実施した。これまでの様々な活動を通して、児童に青少年赤十字の一員としての自覚が高まっていることを感じた。

今後の取り組みの見通し

- ・地域の素材や人材を学習に取り入れた交流活動や体験活動を重視してきたが、地域には児童の心や体、学力を育むことができる素材や人材がまだまだねむっている。今後もそ

れらの開発を進め、学校と地域が一体となり、地域の教育力を活用する活動へと発展させていきたい。そして、地域とのふれ合いをさらに深め、「ふるさと日高」と共に生きる児童を育てていきたい。

- ・総合的な学習の時間及び生活科を中心に研究を進めたが、他の教科等での取り組みは十分とは言えない。相互の関連を図ったり、意図的に関連させたりして学習活動を行えるようにしていきたい。さらに、学習で身に付けた力が、生活の場での課題解決に生かしていけるような取り組みも考えていきたい。

選考員のコメント

「気づき、考え、たくましく活動する児童の育成」を研究主題として、青少年赤十字の態度目標を教育活動に活用する貴重な実践が行われている。特に研究を進めるに当たって、学習研究部と青少年赤十字活動推進部を組織し、取り組みの重点化が適切に図られている。中でも、総合的な学習の時間や生活科において、「気づき、考え、実行する」といった学習展開を工夫することは、新学習指導要領が目指す、思考力、判断力、表現力の育成とともに合致する有意義な取り組みとして大いに参考になるものである。

共に生きていく喜びを感じる活動を

好きです!にしわき わたしのふるさと

にしわき
兵庫県 西脇市立西脇小学校

活動の種類	活動の単位	活動期間	教育課程上の主な位置づけ
奉仕・福祉	全校生	通 年	総合的な学習・課外

活動のねらい

・ねらい

地域の人々の平和や福祉に貢献するような活動を行い、奉仕と共生の心を養う。

・動機、背景など

西脇市が掲げている市政方針の一つに「市民主役のふるさと運営」がある。具体的に、「わたしのふるさと役立ちプラン」として西脇市が、子どもでも大人でも何らかのアクションを起こしていこうと呼びかけている。こういった西脇市の提案を受けて本校では、全校生を対象に、「好きです!にしわき わたしのふるさと役立ちプラン」と称して取り組んでいる。また、そのことを機に、他の自主的な活動も積極的にすすめている。

具体的な活動内容

「好きです!にしわき わたしのふるさと役立ちプラン」

私たちの住んでいる西脇市では、市政方針の一つに「みんなで取り組むふるさと再生」「みんなで取り組む豊かさ再発見」のためのアクション(行動)プランを「市民主役のふるさと運営」と称し、活動と呼びかけている。具体的には、子どもでも大人でも自分のできること、普段行っているさりげないアクション(行動)を、個人や集団、地域として起こしていこうと呼びかけているものである。

こういった西脇市の提案を受けて本校では、「好きです!にしわき わたしのふるさと役立ちプラン」と称して、高学年児童(4・5・6年児童)を対象に夏休みや冬休みなどの長期休業日前に実践と呼びかけてきた。結果、多くの児童が自分にできることを自分で考え、地域のためにがんばることができた。活動を行った児童からは、「人のために何か役に立てるということは、とても気持ちがいい」などの感想が多く、喜びとともに大きな達成感が生まれている。また、本年度はこの取り組みを全校生を対象としたものと規模を拡大し、学校全体で取り組んでいる。

具体的には、近所のグラウンドや広場、公民館や図書館など、自分達で活動場所を考え、草とりや落ち葉拾い、掃除など自分達にできることは何かを考え、自主的に活動している。「図書館の前で数人の子がごみ拾いをしているのを見て感心

しました。」「童子山公園で、落ち葉を集めて掃除をしている子を見かけましたよ。」という地域の方からの電話が学校にかかってくることもある。また、本校児童だけではなく、その家族や地域の人たちも子どもたちと一緒に清掃活動などを行っており、本校の取り組みから地域の取り組みへと活動の輪が広がりつつある。また、自分たちが通っていた幼稚園に出向き、植木の剪定の後かたづけ、花の苗植え、草引き、本の整理なども手伝ったりと、活躍の場がどんどん広がってきている。夏休みの度に何人もの児童が幼稚園に行き、いろいろな作業を手伝うことを、園長先生たちが首を長くして待ってくださっていることも嬉しいことである。

「作業の後は、とっても気持ちがいい。」「汗だくになるし、しんどいけれど、ゴミを拾ってきれいになった公園をみると、嬉しい。」などの児童の感想からわかるように、自分たちの自主的な活動が自分自身にとって気持ちがいいと感じるだけではなく、自分の行っていることが周りの人に喜んでもらえる、誰かの役に立っているという実感が、活動を継続して感じられていることでより確かなものへと深まってきている。



本の整理

ボランティア委員会

人のために自分にできることをもっとしたいという気持ちが新たな形となって、昨年度からボランティア委員会が誕生した。ボランティア委員会では、通学路の歩道橋や図書館など学校周辺の清掃活動を行ったり、校内に危険な箇所がないか校内安全パトロールを行ったりして、過ごしやすい学校づくり

に努めている。また、ペットボトルのキャップを集め、集まったお金でワクチンを購入するなどの活動を行っている。昨年は保護者や地域の方の協力もあり、約13万個のキャップを集めることができ、160人分のワクチンを購入することができた。今年度も約10万個のキャップを集めることができ、この2年で約23万個ものキャップを集めることができた。

また、児童会とも連携し、共同で募金活動も行っている。今年度は昨年度に引き続き、海外たすけあい救援金を集める活動を行った。児童が手書きでプリントを作成し、それを各家庭に配布して呼び掛けた。校内では、救援金を呼び掛けるポスターを全ての教室に掲示し、全校生徒に呼び掛けた。また、昨年度と同様に校内マラソン大会時にも来校者の前で呼び掛けた結果、多くの児童や保護者、地域の方からの協力を得ることができた。また、花づくり委員会と協力して、学校で「チューリップ」「ネモフィラ」「アリッサム」などを育て、それを近くの高齢者施設へ届けた。

防災訓練

本校では以前から防災学習を行っているが、昨年度より、日本赤十字社兵庫県支部の方々にも来校していただき、『防災訓練』と称して、保護者だけでなく児童の安全のために登下校を毎日支えてくださっている「子ども見守り隊」の方々や、地域の方々にも参加していただき、地域防災力の強化を図っている。内容としては、日赤兵庫県支部の方々に指導をしていただきながら、5年生は応急処置の実践演習を、6年生は心肺蘇生法の実践演習を行っている。「見るのと実際にやるのとでは大違いで、最初はうまくできなかった。」「家に帰ってから家の人に学習した心肺蘇生法について話をし、家族で人の命を助けるということを初めて一緒に考えました。」など、児童は実践的な技能の習得はもちろんのこと、青少年赤十字の実践目標の一つである「健康・安全」の『生命と健康を大切にすること』ということについて再度高い意識を持つことができた。また、保護者や地域の方々にも参加していただいた結果、学校を核とした地域としての防災意識の向上を図ることができた。



応急処置の実践演習

保護者、地域の活動

児童が安心して登下校できるようにと、地域の方が「子ども見守り隊」を結成され、以前から児童の登下校の際に通学路に立ち、児童の登下校の際の安全を見守ってくださっている。また、西脇小学校の「好きです!にしわき わたしのふるさと

役立ちプラン」やボランティア委員会の活動が、多くの方に知られるようになり、こういった活動が保護者の方たちの間にもその輪を広げつつある。本年度から、元PTAの役員の方たちを中心に、「おやじの会」が結成され、他の保護者にも呼び掛けて、学校の奉仕作業への参加や、河川敷の清掃、星空観測会や学用品のリサイクルバザーの開催など、学校や地域のために自主的に活動されている。

児童が「好きです!にしわき わたしのふるさと役立ちプラン」で地域のために何かできることを自発的にがんばり、それを受けて保護者や地域の方が学校のために、児童のために自発的に活動してくださっている。今、こうした青少年赤十字の実践目標の一つである「奉仕」のサイクルが、少しずつではあるが、我が町西脇市に生まれ始めている。

オーケストラ部

西脇小学校には県下でも珍しいオーケストラ部がある。本校の4、5、6年生が在籍しており、「MBS子ども音楽コンクール優良賞」などを含め、数々のコンクールで優秀な成績を収めている。昨年の10月、そのオーケストラ部に地元の高校生が西脇市の特産品である播州織りで110名のユニフォームを作製してくださった。ユニフォーム全てが手作りで、受け取った児童達の大きな喜びと活動の励みとなり、ユニフォームを作ってくれた高校生も参加する、地域の催し物に出向き、感謝の気持ちを音楽で伝えている。これもまた、「奉仕」のサイクルのきっかけとなっていくであろう。



オーケストラの発表

活動のポイント

- ・「好きです!にしわき わたしのふるさと役立ちプラン」においての実践手順〈ニーズの発見—課題解決のための準備や計画案の作成—実行—反省〉を定着させることで、その活動の意義を一人一人が見極める。
- ・福祉体験：西脇市社会福祉協議会の協力を得て、車椅子体験、点字体験、アイマスク体験、盲導犬学習、高齢者体験を実施した。
- ・命の学習：西脇市健康づくりセンターが本校の依頼を受けて、必要な人材を選出し紹介。
- ・ボランティア委員会：青少年赤十字の教材や資料を活用した。
- ・防災訓練：日赤兵庫県支部から講師を派遣してもらい、実施した。

活動の成果

- ・モデル校の指定を受けたことで、活動方針や活動内容などが今まで以上にはっきりとした。
- ・年度末の学校評価にも教職員の間から、本校の青少年赤十字の今後の活動について前向きな意見が多く出た。
- ・全校生を対象とした活動を積極的行ったことで、本校の教職員にも青少年赤十字活動の大切さなどが理解されてきた。
- ・保護者や地域の方々にも青少年赤十字活動が知られるようになった。

モデル校指定後の変化

- ・青少年赤十字活動を保護者や地域の方々に知っていただくことができ、活動に対する理解や協力を得やすく、活動がスムーズに展開することができた。
- ・教職員のなかで共通認識を持つことができるようになり、学校全体や委員会など、様々な活動において青少年赤十字活動を行いやすくなった。
- ・助成金を活用することで、外部に講師を依頼することができ、より専門的な体験学習を行うことができた。

今後の取り組みの見通し

- ・青少年赤十字の協力を得て「健康・安全」面の活動に取り組む。(心肺蘇生法講習会・PTA)
- ・「奉仕」「健康・安全」の活動から、「国際理解・親善」にも活動を広げる。

選考員のコメント

まず、「好きです！にしわき！わたしのふるさと」というネーミングが素敵です。「みんなの役に立つことがしたい、喜んでいただける活動をやってみたい」、そんな584人全員の「まあるい」まごころが素直に伝わります。

その思いが実践になって、しかもそれが地域に広がり、さらに、次はこんなふうにしたいと未来に繋がっているところが素晴らしいと思います。まさに「奉仕と共生」の実践です。

中学校の部

Junior
High School



障がいを理解し補い合うためのJRC活動

～JRC委員会を中心にした難聴生徒への情報保障を核にして～

埼玉県 さいたま市立大宮南中学校

おおみやみなみ

活動の種類	活動の単位	活動期間	教育課程上の主な位置づけ
奉仕、国際理解・親善	全校	通年	特別活動

活動のねらい

本校は、「ことばの教室」を併設している関係で、難聴生徒が多数在籍している。要約筆記活動で字幕を提供することで、難聴生徒は他の生徒と同じように情報が得られる。この活動を通して、生徒には共に生きる姿勢や互いに助け合う実践力を身につけて欲しいと願っている。

具体的な活動内容

1. 情報保障活動

本校には聴覚障がいの生徒が多く在籍している。聴覚障がいの生徒への情報保障の手段として、集会や儀式等においてパソコンにリアルタイムで文字を入力し、それをスクリーンに投影する方法をとっている。聴覚障がいの生徒だけでなく、健聴の生徒にとっても文字があることで、大変わかりやすいものである。

これらの活動は、準備からパソコン入力まですべて生徒の手によって行われている。

難聴者への要約筆記やノートテイクの取り組みが高校や大学でも広がっている。青少年赤十字（JRC）の経験をいかして、大宮南中の生徒たちが、将来そのような活動に自主的に関わってくれたらと願っている。



パソコンで要約筆記の様子

2. エコキャップ回収活動

今年度は、各クラスに回収ボックスを設置し、全校生徒の意識付けを図った。

キャップの回収には、生徒だけでなく、教職員、地域の方々の協力も得ているため、毎週40%のポリ袋がいっぱいになるほどの回収量である。JRC委員会の広報日より「ひかる汗」や学校だよりを通じて、回収量や寄付により得ることができたポリオワクチンとそれに相互する人数を報告している。

3. ボランティア清掃

有志の生徒が朝の時間を利用して、学校内や周りの道路の清掃を行っている。JRC委員会では、この活動に率先して参加することはもちろん、全校生徒へボランティア参加への呼びかけを行っている。

4. 通学路清掃

JRC委員会主催で行われ、全校生徒で取り組む通学路を清掃するねらいとしては、

- ・社会への奉仕の気持ちを深め、進んで公共の福祉と社会の発展のために尽くす態度を育てる。
- ・地域社会への所属感を深め、自分たちの地域への貢献を考える態度を育てる。

5. 体育祭の敬老席運営

5月の体育祭には、地域のお年寄りの招待状を作成し、生徒に呼びかけて届けてもらっている。当日は、JRC委員会が案内や湯茶の接待を行い、お茶を出しながら一声かける等、お年寄りとの交流を深めている。

6. 募金活動

東日本大震災では、JRC委員から「私たちの手で募金活動をやりたい」という声があがり、生徒会との合同で実行に移された。

毎年、JRC委員会が全校生徒に呼びかけ、赤い羽根募金活動を行っている。JRC委員の呼びかけで集まった有志とJRC委員が、さいたま新都心駅前で街頭募金を行った。また、正門での校内募金には多くの生徒や教職員の参加がみられた。

7. 国際交流

生徒会長、JRC委員長の歓迎の言葉も韓国語を交えて行った。韓国RCY（Red Cross Youth）のメンバーのホームステイ受け入れ、授業参観、生徒との交流と収穫が大きな行事であった。自分たちの活動が海の向こうにつながっていると実感できた活動である。



朝の時間を利用した清掃

活動のポイント

共に生きる姿勢を身につけるという視点で、地域の中に積極的に参加していく機会を作った。

- 学区内ボランティア清掃
- 赤い羽根街頭募金の実施（さいたま社会福祉協議会）
- ペットボトルキャップ集め（NPO 法人エコキャップ推進協会）
- 大宮区役所による夜間防災訓練への参加（大宮区役所総務課・日本赤十字社埼玉県支部）
- 韓国 RCY との国際交流事業（日本赤十字社埼玉県支部）



エコキャップ回収活動

活動の成果

1. ペットボトルキャップ募金

平成 20 年度の文化祭で JRC 委員会が、「私たちにできそうなこと」としてスタートして活動である。2 年経った現在では、校内だけでなく地域へも働きかけて、山のようなキャップが集まってきている。昨年度、業者を通して寄付が協会に送られたが、その結果 106 人分ものポリオワクチンになった。今年度は、それを上回る量が集められている。生徒自身に目標を立てさせ、目標を達成していくための方法を考え実行してきた。クラスごとにキャップ収集箱を置き、全校生徒の意識化を図ることで、積極的な回収が進められている現状である。

2. 地域との交流

通学路清掃や体育祭での敬老席設置、ペットボトルキャップ回収協力の呼びかけなど、JRC 委員会が中心になり地域へ積極的に働きかけてきた。

今後、地域近隣の老人介護施設など、機会を作って訪問したい。

3. 要約筆記

助成金を活用して、JRC 委員会が使用する要約筆記用のパソコンを購入した。このパソコンで朝会や儀式での要約筆記を充実させることができた。

モデル校指定後の変化

- 指定を受けたことで、JRC 委員会の呼びかけも活発になり全校生徒の「一人一ボランティア」の意識が高まり、ボランティア朝清掃や募金活動への参加が増えた。
- 東日本大震災後に、生徒の中から自分たちでできる活動を考えようという声が上がった。話し合いの結果、校内で募金活動を行うようになった。このような「気づき」「考え」「実行する」精神が少しずつではあるが身についてきた。
- ペットボトルキャップ回収は、生徒だけでなく地域へ呼びかけて協力を得ることで、地域学校が一丸となり回収活動が展開されるようになった。指定の補助金でペットボトルキャップ専用回収ボックスを職員室前に設置したことで、さらに意識が高まった。

今後の取り組みの見通し

福祉教育の年間指導計画の中に JRC の活動を位置づけたので、実施していく。

- ・道徳、特別活動の授業などを通して、日本赤十字社の歴史やアンリ・デュナンなどを取り上げて学習していく。日赤埼玉県支部で作成した指導案などを活用する。
- ・助成金で購入したボランティア関係の図書などを積極的に活用して、ボランティアについて学ぶ授業を行っていく。
- ・「一人一ボランティア」を合い言葉に、1 回は何かしらボランティア活動を行う雰囲気盛り上げていく。

選考員のコメント

「障がい理解し補い合うための JRC 活動」を研究主題に掲げ、JRC 委員会が中心となって様々な充実した青少年赤十字活動が展開されている。メインの取り組みである難聴生徒への支援として、生徒の手による要約筆記やノートテイクの取り組みが行われており、赤十字の人道・博愛の基本的理念の素晴らしい実践の場となっている。さらに、エコキャップ、ボランティア清掃、通学路清掃、体育祭敬老席運営、募金活動、国際交流等の活動がより一層、青少年赤十字活動の幅を広げ、大きな成果をあげている。

健康・安全プログラムから生命の尊厳を考える

人とのつながりを大切に

石川県 金沢市立城南中学校 じょうなん

活動の種類	活動の単位	活動期間	教育課程上の主な位置づけ
健康・安全	全校	通年	特別活動、 総合的な学習の時間

活動のねらい

本校の生徒はパワーがあり、自分の興味のあることには一生懸命取り組む半面、他者とのようにかかわればよいかわからず、周囲の迷惑を顧みることのできない生徒も少なくない。そこで、人とのかかわりを大切にし、自他ともに健康と命を大切にする態度を育てることをねらいとして活動に取り組んだ。

具体的な活動内容

1. 人とのつながりを深める活動

(1) 朝のあいさつ運動

- ・あいさつは他の人を認め、大切にすること、日常生活の基本である。城南中学校では継続的にあいさつ運動に取り組んでいる。
- ・生徒、教師、PTA が参加
生徒：部活動単位の輪番制で、学期に1回、1か月～2か月の期間を設定して行った。
PTA：学級単位の輪番制で、週2回、通年で運動を行った。

(2) スクールフォーラム（平成 21 年度）

- ・土曜参観（10/3）にあいさつ運動について話し合った。
- ・生徒会執行部、学級リーダー、教師、保護者が意見を発表した。
- ・あいさつの質を高める、あいさつ運動にバリエーションをもたせるなどの意見が出た。

(3) 生徒総会（平成 22 年度）

- ・事前に生徒にアンケートを取り、城南中学校のあいさつについての課題を分析した。
- ・レベルアップをめざし、「あいさつは大きな声で、自分から進んで、気持ちを込めて誰にでも」という4つのスローガンを提案し、今後の取り組みに生かすことを決定した。

(4) 全市児童生徒あいさつの日

事前：努力事項を確認し、各自のめあてを考える。
当日：生徒会執行部、教師、PTA が朝のあいさつ運動を行った。1日のあいさつをふり返り、セルフチェックを行った。
事後：セルフチェックを集計・分析し、生徒会だよりを発行した。

(5) 「感謝のメッセージ」（平成 22 年度）

- ・全市児童生徒「絆活動」の日の活動として、日頃、伝えることができない感謝の思いを、メッセージにして伝えることで、周囲の人との絆を感じることを目的としている。
- ・友達、地域の方、先生などへのメッセージと家族へのメッセージを書く。家族に書いたメッセージには家族から返事もらった。
- ・メッセージはクラスごとに掲示し、いろいろな生徒が見ることができるようにした。
- ・「絆活動の日」だけでなく、事前に感謝の表わし方を学んだり、事後にはメッセージを見た感想を書いたりした。
- ・学校だより、学年だよりなどで活動のようすを保護者や地域へも知らせた。

(6) 成果と課題

- あいさつ運動や感謝のメッセージの活動により、他の人とのつながりを実感することができた。
- 自分も他の人も大切にされるべき存在であることがわかった。
- ▲道徳や学活などさまざまな時間を利用して、継続的に取り組んでいく必要がある。

2. ボランティア・勤労的活動

(1) 全市児童生徒ボランティアの日（平成 21 年度）

- ・7/28（火）に、部活動単位で校区のごみ拾いをし、記念撮影を行った。
- ・校区がきれいになり、地域の方にねぎらいの言葉をかけてもらい、励みになった生徒もいた。



アルミ缶回収

(2) アルミ缶回収 (7月、10月)

- ・平成 21 年度の 1 回目(7月)は全市児童生徒ボランティアの日の活動の一環として実施。
- ・生徒会行事として、PTA の協力のもと、町会単位でアルミ缶を回収した。
- ・ボランティア活動として、町会ごとに独自で地域のごみ拾いや草むしりを行った。
- ・生徒総会で話し合い、平成 21 年度の収益でグラウンドから見える位置に時計を設置した。
- ・自分たちの活動によって、みんなの役に立つものを購入したという充実感を味わうことができた。

(3) 花植えボランティア (平成 22 年度)

- ・7月、12月の2回実施し、生徒・保護者・職員の有志が参加した。
- ・7月の花植えは全市児童生徒ボランティアの日の活動の一環として実施し、サルビアやマリーゴールドを植えた。12月にはパンジーなどの苗を植えた。
- ・花植えだけでなく、水やりも生徒の有志で行った。



花植えボランティア

- ・金沢市花いっぱいコンクールで優秀賞を受賞した。

(4) ペンキ塗り (平成 22 年度)

- ・生徒・保護者・職員の有志が参加し、校舎の壁を塗り替えた。
- ・PTA の活動「SEVEN.7 プロジェクト自分が価値ある存在であることを社会に示そう」の一環として実施。地域の方の協力も得ることができた。

(5) エコキャップ運動 (平成 22 年度)

- ・捨てるものを資源として活用することで、世界の恵まれない子どもの命が助かる。
- ・アルミ缶回収の際に、ペットボトルキャップを回収した。
- ・13,600 個を回収し、17 人分のワクチンに換えることができた。

(6) 成果と課題

- 地域の方とのつながりを感じることができた。
- 自分たちのためだけでなく、他の人のためになる活動を行うことにより、自分が人の役に立つ存在であることを実感できた。
- ▲生徒の自発的参加を促す必要がある。

3. 救急法講習**(1) 実施概要**

- ・平成 21 年度は 2 年生の総合的な学習の時間に、日赤石川県支部より講師をお招きし、2 時限の講義・実技講習を受けた。
- ・平成 22 年度は 2 年生の保健体育科で、1 時限の講義・実習を受けた。

(2) 講習内容

- ・救急法の基礎知識
- ・心肺蘇生法
- ・三角巾の使い方

(3) 成果と課題

- 実技・講習を経て、救急法への関心が高まった。
- ▲一過性の知識・技能になりがちである。



救急法講習

4. 性教育講演会（平成 21 年度）

(1) 実施概要

- ・1年生の総合的な学習の時間に、助産師の方をお招きし、講演していただいた。
- ・講演を終えて、生徒は感想を書き、助産師の方に送った。

(2) 講演内容

- ・性に関する様々な問題
- ・妊娠・出産の大変さ
- ・妊婦体験

(3) 生徒の感想

- ・両親や身近な人の愛情の中で、自分が育った。(女子)
- ・出産の場面でお母さんが辛そうだったけど、お父さんがサポートしていて良かった。(男子)

(4) 成果と課題

- 自分が大切な存在であることを実感できた。
- ▲1年次だけでなく、継続的な実施が必要である。

活動のポイント

- ・日赤石川県支部から講師をお招きして、救急法講習を行った。専門的な知識・技能をもつ講師による講習を受けることができた。
- ・あいさつ運動、ボランティア・勤労的活動で PTA と連携した。本校の PTA は学校の教育活動に協力的であり、今後さまざまな面での連携を考えていきたい。

活動の成果

- ・あいさつ運動やその他の生徒の活動の様子を記録として残し、平成 21 年度の石川県青少年赤十字指導者研修での発表において利用し、参加者に生徒の様子を示すことで、自分たちの行った活動をふりかえることができた。
- ・救急法の講習を映像記録として残すことで、平成 21 年度石川県青少年赤十字指導者研修会において、参加者に講習の様子を発表することができた。また今後はこの映像記録を用いて保健体育の授業などで活用することも考えられる。
- ・購入した三角巾を使い救急法の講習の際には、講習を受ける生徒全員が2人1組となり、それぞれが自分自身で三角巾を扱うことができたので、技能の習得に役立った。また今後は、保健体育の授業でも活用できる。
- ・健康・安全教育の中でも、特に性教育については DVD と関連機器を購入することによって、保健体育科の授業で、生徒の実態に応じた指導ができた。

今後の取り組みの見通し

あいさつ運動、ボランティア・勤労的活動は、生徒会・PTA との連携を維持しながら、さらに発展させていく。特に、ボランティア・勤労的活動についてはさまざまな活動が考えられる。モデル校指定の2年目には各種のボランティア活動を新たに実施したが、今後は生徒が主体的に活動できる取り組みを模索していきたい。

選考員のコメント

「健康・安全プログラムから生命の尊厳を考える」を研究主題として、青少年赤十字の実践目標である「健康・安全」において、有意義な取り組みが行われている。特に、「人とのつながりを深める活動」において、絆活動として「あいさつ」や「感謝のメッセージ」を中心とした、決め細やか取り組みが行われている。さらに、ボランティア・勤労的活動、救急講習、性教育講演会などの活動を計画的に実行するなど、人とのかわり合いを深める上で効果的な活動が行われている。

高等学校の部

Senior
High School



人を思いやる気持ちを持ち続けよう

JRC部から一高生へ 地域へ

茨城県 県立日立第一高等学校 ひたちだいいち

活動の種類	活動の単位	活動期間	教育課程上の主な位置づけ
健康・安全、奉仕	学校の取り組み	通 年	部活動

活動のねらい

これまでの青少年赤十字(JRC)部の活動として、校内においてはプルタブ・ペットボトルキャップの回収や校内・校外の清掃、災害時の募金活動等を継続して実施してきた。また、校外では地域の小中学生対象の青少年赤十字リーダーシップ・トレーニング・センター(以下トレセン)や献血推進の街頭活動、学童クラブのボランティアに携わってきた。かつて小中学生としてトレセンに参加した部員がリーダーをつとめる役回りとなり、トレセン等の機会に他校生との交流もはかっている。

これらの活動を通して、赤十字の精神である「気づき・考え・実行する」というプロセスに基づき、校内において気づき、考えたことを、さらに地域に発信して実行し、自分たちができる活動を広げることをねらいとする。

具体的な活動内容

年間の活動の中から、日立地区トレセンと日立市立駒王中学校校内トレセンを中心に報告する。

前年度活動の反省事項に「手話をマスターしたい」という課題があった。そこで、次のような5つの段階を経て活動に取り組んだ。

- ①県青少年赤十字高校生トレセンに参加し、ワークショップテーマを「手話講習会を開く」に決めて計画を立てた。
- ②日立地区トレセン(小中学生 84 名)に参加し高校生リーダー(8 名、他校 4 名)として、グループエンカウンターとフィールドワークを担当した。グループエンカウンターでは「手話タイム」を設け、簡単な手話クイズや自分の名前を指文字で表し、自己紹介しあう「指文字にチャレンジ」でグループ活動を盛り上げた。
- ③近隣の日立市立駒王中学校トレセン(中学生 28 名)に高校生リーダー(5 名)として参加し、赤十字概論とワークショップを担当した。②の反省点を活かして手話クイズや指文字の自己紹介等のグループ活動を行った。
- ④近隣の高校の先生を講師に招き手話講習会を実施した後、水戸スポーツフェスティバルで「ふくろう工房」の出店を手伝った。手話の活用によって聴覚に障がいのある参加者と以前より親しく交流することができた。
- ⑤県トレセン事後研修会にて報告、発表した。



手話タイム



リーダーとして参加したトレセン

活動のポイント

これまで本校のJRC部が継続してきた活動を継続することを重視している。特に、長年の活動の中で培ってきた信頼関係を大事にし、地域の期待にも応えられるよう努めている。

毎年、部員2名が茨城県青少年赤十字高校生連絡協議会の役員をつとめ、運営に参加する。また、新入部員は全員が茨城県トレセンに参加して研修する。その経験をもとに、日立地区トレセンにおいて、グループエンカウンターで仲間づくりのゲームや手話を取り入れ、中学校では、部員が講師となり赤十字理念の学習をする等、活動にいかしている。

活動の成果

- ・これまでの活動を継続すると同時に、テーマを掲げて諸活動に取り組むことができた。
- 例1) テーマ「手話」…年間活動に手話を取り入れ、計画して実行する。
- 例2) テーマ「献血推進」…日立献血ルームで研修した後、ホームルームを活用して推進し、日立駅前でキャンペーン活動に参加する。
- ・助成金を活用することにより、カメラやプリンターを購入してJRC活動の記録と広報を充実することができた。また、交通費を支給して活動の回数を増やすことができた。
- ・モデル校の指定を受けることにより、校内と地域での協力態勢が確立し、青少年赤十字活動を実施する上で指導者間の連携が密接に図られるようになった。

モデル校指定後の変化

- ・指定前に比べて、活動した生徒たちの「健康・安全」や「奉仕」に対する意識が高まり、それが全校にも影響を及ぼして活性化に貢献できた。
- ・校内はもちろんのこと、地域の小中学校や関係機関との連絡経路が確立され、今後も継続して情報交換や活動に取り組むことができる。

今後の取り組みの見通し

- ・活動の種類を「健康・安全」と「奉仕」から「国際理解・親善」にまで広げ、青少年赤十字活動を通して、学校教育活動全般を活性化するための活動計画を作成する。
- ・赤十字のネットワークを活かして、地域の赤十字奉仕団の協力を求めていく。

選考員のコメント

「JRC部から一高生へ 地域へ」という意欲の高まりと実践のひろがりが見事です。

校内で気づき、考えたことを、地域を巻き込んで実行する、その方程式がみごとです。

随所に地域のリーダーとしての自覚と自信がうかがえます。青少年赤十字の態度目標を具現化した、素晴らしいメンバー達です。



血液事業についての研修

身近なところから人のために尽くす活動へ

部活動を活性化し、赤十字の理念を実践

とみおかひがし
群馬県 県立富岡東高等学校

活動の種類	活動の単位	活動期間	教育課程上の主な位置づけ
健康・安全、奉仕	部活動	通 年	部活動

活動のねらい

部活動をより活性化するために2つの目標を掲げた。

1. 講習会の開催…救急法や手話などの講習会を開くことで、より深い知識や資格を習得し、さまざまな機会に他の人に役立てる。
2. 奉仕活動の充実…週1回定期的に保育園に行き、奉仕活動を実施しているが、更に地域の福祉施設に活動の幅を広げる。

具体的な活動内容

1. 「日本赤十字社救急法救急員」の資格取得を目指して

この資格の取得には、手当での基本、人工呼吸・心臓マッサージの方法、AEDの使用法、気道異物の除去などを学ぶ「基礎講習（1日間）」と、急病とその手当、けが・傷の応急手当（止血・包帯の仕方）、骨折等の固定法、搬送などを学ぶ「救急員養成講習（2日間）」を受講し、それぞれ検定に

合格しなくてはならない。平成21年度、22年度と2年間にわたりこれらの講習を受講し、部員のほとんどが、救急法救急員の認定証を取得した。今までに地区青少年赤十字のリーダーシップ・トレーニング・センターか日本赤十字社群馬県支部主催の救急法フェスティバルなどで、救急法の短期講習を受講したことがある生徒も何人かいたが、こうして体系的にしっかりと救急法の基礎を学ぶ経験は初めてであり、いっそう救急法に対しての意識が高まった。また、救急法を学ぶことで、青少年赤十字活動に対して意識を新たにすきっかけにもなった。赤十字の七原則のひとつである「人道」にある「人間の生命は尊重されなければならないし、苦しんでいる者は、敵味方の別なく救わなければならない。」という理念や、青少年赤十字の実践目標の一つである「健康・安全…生命と健康の大切さを学び、人間尊重の精神を養う。」という理念についても思いを巡らせる契機になった。更に文化祭では三角巾を用いた固定法を紹介するコーナーを設け、一般の方々に紹介することもできた。



AEDの使い方を学ぶ救急員の養成講習

2. 手話講習

生徒の希望により手話講習会を企画し、講師に富岡市聴覚障がい者福祉協会の方と手話通訳者を招き3回にわたって実施した。1回の講習時間は2時間を予定したが、生徒は集中して講習を受けていたので、あっという間に時間は過ぎてしまったようだ。自己紹介や日常会話の手話を教えてもらい、一人ひとり実技指導を行っていただいたので、生徒も意欲的に覚えることができた。日頃から手話に対する関心が高かったもので、熱心に受講することができた。高校卒業後の進路を考えている生徒にとって、手話のできる看護師であったり保育士であったりと、夢が広がったようである。更に学習を深めたい生徒は公的な機関が実施している手話講習会に参加し、将来は手話通訳者を目指したいと考える生徒も出てきた。聴覚障がい者とのコミュニケーションの方法は「手話」「指文字」だけではなく「筆談」「空書」「読話」といったものがあること、また「手話」は地域や年代により表現が微妙に違うことなども学んだ。手話を学ぶことは、単に言語を学ぶだけのことでなく、社会的に疎外されてきた聴覚障がい者の問題や歴史、文化を知ることでもあるというメッセージをしっかりと受け止めて、今後も勉強を継続させたい。

3. 奉仕活動の充実

本校では週1回、放課後を利用し保育園に奉仕活動に行き、夏休みには福祉施設の夏祭りなどのイベントに参加している。今年はいくつか、活動の場を広げ、内容を充実させようということで、ハンドベルやキーボードを購入し、高齢者福祉施設に慰問活動をするようになった。最初はハンドベル演奏を聴いてもらうだけであったが、それだけでは交流が深まらないことに気づき、キーボードも持ち込み、一緒に歌を歌い、楽しんでもらえるような内容に変えた。生徒たちは実際に施設の方々との交流の中から、発展的に内容を工夫できるようになってきた。



ハンドベル演奏

活動のポイント

講習に必要な機材の運搬、講習会場での設置や後片付けなどは、特に当番を決めずV・Sによって行った。講習の実施にあたっては、日赤群馬県支部に講師の手配や派遣、機材の手配を依頼した。青少年赤十字賛助奉仕団員の方1名も一緒に講習に参加し、適宜運営にご協力いただいた。福祉施設訪問に際しては、継続的に慰問活動ができるよう、学校に近く、生徒が訪問しやすい距離にある施設に依頼した。

活動の成果

- ・救急法の養成講習で学んだ手当での基本から、けが・傷の応急手当、AEDの使用法、骨折等の固定法・搬送など、日常生活の中で活かそうという姿勢が生まれ、生命を尊重する姿勢が強まった。



心肺蘇生法

- ・助成金を活用することでハンドベルやキーボードを購入し、それらを利用して、保育園や高齢者福祉施設への訪問内容が充実し、更に活発化した。
- ・校内において「花いっぱい運動」を展開し、花を植えたり水の管理をしたりと校内の美化に注意するようになった。
- ・保育園でのボランティア活動に加えて、さまざまな施設でボランティアをするために、まずは手話を学ぼうという意欲的な態度が生まれ、活動の幅が広がった。

モデル校指定後の変化

- ・指定前に比べて救急法を学習することで、健康・安全に対する意識が高まった。またこうして多少の知識を備えた生徒達は、県主催の交流会で赤十字救急法手技(三角巾)が行われると積極的に参加するようになった。
- ・ボランティアの実践場所が保育園から高齢者福祉施設へと広がり、進路を考える上で保育士や看護師、理学療法士、介護福祉士と様々な職種の人に関心を持つようになった。また、実際の仕事内容や職場の雰囲気、やりがいなど、体験を通して考えられるようになり、進路を考える上で重要なきっかけとなっている。

今後の取り組みの見通し

- ・モデル校指定期間同様の活動を行い、成果を継続して部活動を活性化していきたい。

選考員のコメント

「身近なところから人のために尽くす」という思いが、すべての活動に共通しており、発想も実践も実にシンプルで清々しい。資格取得につながる講習、習得した成果を活用して社会貢献、また、日々の実践が自らの進路決定の大きな要因となっている。さらに、それが日常の行動を主体的にしているという螺旋的連関がまた素晴らしいと思った。

著名人の言葉

Phrases on the Red Cross Movement by the World celebrities

人間なら誰の心にも献身的な愛情が内在するものなのに、その心でものを感じ、考え、行動することが難しい人間たちに、熱心に呼びかけて思い出させてくれるのは、赤十字である。

赤十字は、この世界が将来は、今、私たちが住んでいる世界とは違ったものになれるという願いが持てる勇気を与えてくれる。

私たちは、この暗闇に光をともしてくれた男「アンリー・デュナン」に深い感謝を捧げると共に、この光を燃やしつづけることをみんなの仕事にしなければならない。

アルバート・シュヴァイツァー

(医師)

日本赤十字社本社・各都道府県支部所在地一覧

本社・支部名	所在地		電話番号
本 社	105-8521	東京都港区芝大門1-1-3	03-3438-1311
北海道支部	060-0001	北海道札幌市中央区北1条西5	011-231-7126
青森県支部	030-0861	青森県青森市長島1-3-1	017-722-2011
岩手県支部	020-0021	岩手県盛岡市中央通1-4-7	019-623-7218
宮城県支部	981-0914	宮城県仙台市青葉区堤通兩宮町4-17宮城県仙台合同庁舎	022-271-2251
秋田県支部	010-0922	秋田県秋田市旭北栄町1-5	018-864-2731
山形県支部	990-0023	山形県山形市松波1-18-10	023-641-1353
福島県支部	960-1197	福島県福島市永井川字北原田17	024-545-7997
茨城県支部	310-0914	茨城県水戸市小吹町2551	029-241-4516
栃木県支部	320-8508	栃木県宇都宮市若草1-10-6とちぎ福祉プラザ内	028-622-4326
群馬県支部	371-0833	群馬県前橋市光が丘町32-10	027-254-3636
埼玉県支部	330-0064	埼玉県さいたま市浦和区岸町3-17-1	048-789-7117
千葉県支部	260-8509	千葉県千葉市中央区千葉港5-7	043-241-7531
東京都支部	169-8540	東京都新宿区大久保1-2-15	03-5273-6741
神奈川県支部	231-8536	横浜市中区山下町70-7	045-628-6306
新潟県支部	951-8127	新潟県新潟市中央区関屋下川原町1-3-12	025-231-3121
富山県支部	930-0859	富山県富山市牛島本町2-1-38	076-441-4885
石川県支部	920-8201	石川県金沢市鞍月東2-48	076-239-3880
福井県支部	918-8011	福井県福井市月見2-4-1	0776-36-3640
山梨県支部	400-0062	山梨県甲府市池田1-6-1	055-251-6711
長野県支部	380-0836	長野県長野市南県町1074	026-226-2073
岐阜県支部	500-8601	岐阜県岐阜市茜部中島2-9	058-272-3561
静岡県支部	420-0853	静岡県静岡市葵区追手町44-17	054-252-8131
愛知県支部	461-8561	愛知県名古屋市中区白壁1-50	052-971-1591
三重県支部	514-0004	三重県津市栄町1-891	059-227-4145
滋賀県支部	520-0044	滋賀県大津市京町4-3-38	077-522-6758
京都府支部	605-0941	京都府京都市東山区三十三間堂廻り町644	075-541-9326
大阪府支部	540-0008	大阪府大阪市中央区大手前2-1-7	06-6943-0705
兵庫県支部	651-0073	兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通1-4-5	078-241-9889
奈良県支部	630-8133	奈良県奈良市大安寺1-23-2	0742-61-5666
和歌山県支部	640-8137	和歌山県和歌山市吹上2-1-22	073-422-7141
鳥取県支部	680-0011	鳥取県鳥取市東町1-271	0857-22-4466
島根県支部	690-0873	島根県松江市内中原町40	0852-21-4237
岡山県支部	700-0823	岡山県岡山市北区丸の内2-7-20	086-225-3621
広島県支部	730-0052	広島県広島市中区千田町2-5-64	082-241-8811
山口県支部	753-0094	山口県山口市野田172-5	083-922-0102
徳島県支部	770-0044	徳島県徳島市庄町3-12-1	088-631-6000
香川県支部	760-0017	香川県高松市番町1-10-35	087-861-4618
愛媛県支部	790-8570	愛媛県松山市一番町4-4-2(県庁内)	089-921-8603
高知県支部	780-0850	高知県高知市丸ノ内1-7-45 総合あんしんセンター1階	088-872-6295
福岡県支部	815-8503	福岡県福岡市南区大楠3-1-1	092-523-1171
佐賀県支部	840-0843	佐賀県佐賀市川原町2-45	0952-25-3108
長崎県支部	850-8575	長崎県長崎市魚の町3-28	095-821-0680
熊本県支部	861-8039	熊本県熊本市長嶺南2-1-1	096-384-2100
大分県支部	870-0033	大分県大分市千代町2-3-31	097-534-2236
宮崎県支部	880-0802	宮崎県宮崎市別府町3-1	0985-22-4045
鹿児島県支部	890-0064	鹿児島県鹿児島市鴨池新町1-5	099-252-0600
沖縄県支部	902-0076	沖縄県那覇市与儀1-3-1	098-835-1177

青少年赤十字モデル校選考会選考員

平成 17 年度

- (1) 学校教育関係者（青少年赤十字全国指導者協議会役員）
藤井 厚介（会長：愛媛県今治市立立花小学校校長）
近藤 信一郎（副会長：福井県福井市大東中学校校長）
福永 恒泰（副会長：兵庫県立神戸高等学校校長）
- (2) 日本赤十字社支部職員
山本 佑幸（神奈川県支部事務局次長）
- (3) 日本赤十字社本社職員
五十嵐 清（総務局組織推進部長）

平成 18 年度

- (1) 学校教育関係者（青少年赤十字全国指導者協議会役員）
佐倉 國藏（会長：京都府京都市立祥栄小学校校長）
小俣 好三（副会長：山梨県大月市立大月第一中学校校長）
広原 啓視（副会長：島根県立大社高等学校校長）
- (2) 日本赤十字社支部職員
畑 喜春（兵庫県支部事務局長）
- (3) 日本赤十字社本社職員
勝村 秀樹（総務局組織推進部長）

平成 19 年度

- (1) 学校教育関係者（青少年赤十字全国指導者協議会役員）
岡部 文尋（会長：奈良県奈良市立富雄第三小学校校長）
小俣 好三（副会長：山梨県大月市立猿橋中学校校長）
広原 啓視（副会長：島根県立大社高等学校校長）
- (2) 日本赤十字社支部職員
東田 雅俊（兵庫県支部事務局長）
- (3) 日本赤十字社本社職員
勝村 秀樹（総務局組織推進部長）

平成 20 年度

- (1) 学校教育関係者（青少年赤十字全国指導者協議会役員）
西 正夫（会長：長野県信濃町立柏原小学校校長）
小俣 好三（副会長：山梨県大月市立猿橋中学校校長）
荒川 恭嗣（副会長：秋田県立秋田北高等学校校長）
- (2) 日本赤十字社支部職員
東田 雅俊（兵庫県支部事務局長）
- (3) 日本赤十字社本社職員
勝村 秀樹（総務局組織推進部長）

平成 21 年度

- (1) 学校教育関係者（青少年赤十字全国指導者協議会役員）
西 正夫（会長：長野県信濃町立柏原小学校校長）
濱村 龍彦（副会長：広島県広島市立国泰寺中学校校長）
飯野 真幸（副会長：群馬県立高崎女子高等学校校長）
- (2) 日本赤十字社支部職員
東田 雅俊（兵庫県支部事務局長）
- (3) 日本赤十字社本社職員
三井 俊介（総務局組織推進部長）

平成 22 年度

- (1) 学校教育関係者（青少年赤十字全国指導者協議会役員）
奥田 誠（会長：千葉県香取市立府馬小学校校長）
濱村 龍彦（副会長：広島県広島市立国泰寺中学校校長）
中村 清志（副会長：島根県立松江東高等学校校長）
- (2) 日本赤十字社本社職員
三井 俊介（総務局組織推進部長）

平成 23 年度

- (1) 学校教育関係者（青少年赤十字全国指導者協議会役員）
奥田 誠（会長：千葉県香取市立府馬小学校校長）
濱村 龍彦（副会長：広島県広島市立国泰寺中学校校長）
中村 清志（副会長：島根県立松江東高等学校校長）
- (2) 日本赤十字社本社職員
服部 亮市（総務局組織推進部長）

青少年赤十字モデル校報告書集（平成 23 年度版）

平成 23 年 10 月 14 日初版発行

発行元 日本赤十字社 総務局 組織推進部 青少年・ボランティア課

住 所 〒 105-8521 東京都港区芝大門 1-1-3

電 話 03-3438-1311（代表）HP <http://www.jrc.or.jp>

国際赤十字・赤新月運動の基本原則

人 道 (Humanity)

公 平 (Impartiality)

中 立 (Neutrality)

独 立 (Independence)

奉 仕 (Voluntary Service)

単 一 (Unity)

世界性 (Universality)

1965 年（昭和 40 年）にウィーンで開催された第 20 回赤十字国際会議で、「赤十字基本原則」が決議され、宣言されました。

赤十字基本原則は、赤十字の長い活動のなかから生まれ、形づくられたもので、「人間の生命は尊重されなければならないし、苦しんでいる者は、敵味方の別なく救わなければならない。」という「人道」こそが赤十字活動の基本で、他の原則は「人道」の原則を実現するために必要となるものといえます。



日本赤十字社
Japanese Red Cross Society